

911.3

才

たのむる

夫天地者萬

物之逆統光

陰者百代之

過客

春夜宜桃李  
園序李香卷也

文後集

天選古詩

昔々陸柏松也

洞中宿人生  
同忽如遠客

杜律  
時天卷行骨

知難東北凡塵

深泊西南天地間

日月ハ百代のこゝろをくしり

しんも又旅人也毎のどし生雁

をうくさるの口こゝろをて老をむ

可眼付

岸也

うらおひりし旅して旅を栖む

古人も多く旅を死にむらり

天中唐詩先達文余タシ

予もいつれの年ありあつた風

流寓之兒

はらわれて漂々のさひや

海濱くさすくさすの秋江上の

詠江注何となく



社  
居人不自辨東四  
書讀華最封野綱

原川巻玉

破心く知の古葉をくくして

ち一りの系 神の御

神 神の御

神 神の御

白川の川をくくして

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

いりてはらるる人しはらるる

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

神 神の御

別墜く物らり  
阿の神をくくして  
末の七日切りの  
を切ると  
不二の峰  
糸の梢

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

阿の神

會諸神

陰夜シワイ 西行  
ヨシ山指ノカヲ  
ミシヨヨリ  
ニモヤハスヤキ

君予尼無水安  
阿麻山ラ世ヲ  
アリテカチリニケ  
我ヲナルン

前達程遠地思死

馮山之暮雲

薛家遠行遊法

杖悠三千里

魂魄曾未夢不入

金光明經

心如幻化

感時花濺淚恨

別鳥驚心 杜子美

西海中有數人室

水尾如魚不廢機

鐵貝眼能逆則

出珠 王維

聲身映天黑魚

眼射波紅

きりし送らぬとと可し船

とけれくあ途とよアのあり

狗くみさりて幻のしらごと

新ふの佃をえく

り春やきりし美の貝佃

もともとのゆりて行道を

アさけり人こい中よりさる

しほけのゆらごととさくら

ことし元禄二とせりや奥羽去念

のり柳只らうめしとみきりて

果としら髪の恨をさぬとい元

身しゆきといさめらぬさる

あけてゆくと定ふと程の末

け其日御早加とと宿い

をとりまうり敵骨の看

いおえとさるも只身す

本朝文粹

祖反事記

行脚者記

行脚天下

尋訪所

法也

師偏歴

楚地花

人生不再

白髮絲

白髮

三三

ハス

秋谷

内儀也

色トイ

そ輝

由ハナシ

アラソビ

シトタニ

タカヘシ

イセ集

サタニキ

袖ノ

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

イセ集

よと出立の侍をひさ子一とゑハ朝の  
湯さゆて雨具を筆のきとせ

あゝおろしき後ととていへハ

さしうしお拾うて湯次のは

あつらふふりあふくれ

家のハ鶴う宿す同行書えん日此

神ハ東のむねわぬの神とて

富士一嶽也無戸室へ入て麓のよ

ちんみのみ中へ火と出見のみと

せれがひへしり家のハ鶴とて又

髪を流るゝ侍とこの謂也將

のハ鶴とて又侍とこの謂也將

の音世へ侍よもの侍

此日目光山の林よりゆらゆらと

云くちやふいふ名を御立たる

あつらふふりあふくれ

付金集の 室方

イカテカハヒマリトモ

シラスギキヤク(紫)

傍ナラセハ

中

ハ

オ

イ

日本記在

ナツムコ

収也

一説云雲中すあつらふふりあふくれとていへハ朝の湯さゆて雨具を筆のきとせ

アトキトハ何サカハニ

仙二ハ何ナレトモ

海クサハナクモ

赤

あつらふふりあふくれ

アトキトハ何サカハニ

アトキトハ何サカハニ

アトキトハ何サカハニ

赤心道場

吾徒の心を空にうつす

秋曲の心を空にうつす

ルイ  
カ  
ヲ  
カ  
セ  
カ  
シ  
イ  
ク  
ヨ  
カ  
モ  
子  
シ

尸  
竹  
竹  
竹  
一  
表  
の  
子  
の  
竹  
も  
お  
ね  
て

○五濁悪世劫・見、煩惱、衆生・命の  
体（あ）と云い、つら、つら、仏の濁世空基

示現（い）一して（い）つら、つら、衆生の元食、喉、礼

つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら

つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら

つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら

つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら

み、み、み、み、み、み、み、み

と、と、と、と、と、と、と、と

と、と、と、と、と、と、と、と

そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ

卯月朔日 御心は清くは首

此心をはと荒ふと書くこと

大卿開基の時に

心成す事をも

清く一天く

とあれ、民ある

物懐多くて

○五濁悪世劫・見、煩惱、衆生・命の

五塵 色、声、香、味、觸、知別、三、入

○世の公衆本ノイニ宮

ミシキトイ

沙

今も本は

一運一運トイマヤ

三信子改布剛毅本訓近仁

天性ノ潔白

八荒、東南西北隅

毒、純正、清民

對陸

徳正神主清平  
何年ノヲハシニ六シテ子

トモアリカタサニハ源コ

ホル、  
陸奥今

河内守ノ建カト山守

陸奥テ本ノト意

又ニニケルナキ

何々々々々々々々々々々々

正徳とハ歳々々々々々々々

白

判捨て正徳一々一々一々

常良ハ何合氏一々一々一々

川嘉

芭蕉の下葉々々々々々々

法光理共我地  
及キコリナツモハ源  
ツカテソク

薪氷袋方々々々々々々々

ね一々象海の雌共一々一々

況ハ思ハ羈旅の難をり々々

杜松曰 一々一々一々

彦  
タラチ子ハカレトテモ

流之曉々々と判て正徳一々

を々々一々五を改て宋悟と

何五三傳をレリト抄クハ  
今ハナヨ運條ノ袖

仍て正徳一々の白々一々一々

宗カ何りて々々々

正餘下一々を電何て流々々々

頃も一々鬼後一々一々一々

正徳一々一々一々一々一々

廬山賦十ト撰ヤラル源九

ひるも入て滝の裏よのりくう  
らみへの籠とト付て付る也。

暫時ハ海へおちりや夏の時

安厩ニあ中後、三位有、後育、十首、後、多、月、十、開、及、中、日、不、定、及、竟、又、亦、り  
那須の平

そよりおとどくしめておんを

ゆくとすうとすう一村をえんけ

りよ雨降日そるれ農まの家

よ一軒をりて明れハ又群中

をりるると群附のうわわ

累列あつとよふけとすれハ群ま

といともしさすうと怪まらまれ

いしすいさわされよは群ハ縦横

よわられたうわくま群人のわ

ふとまきうしあやうはれハ群

のこすま所くくまをぬくま

くはらうらうまき方ぬまの



伝をいひてうら行ハ小娘と  
くまをかきわきとてけうれぬくの  
やうにうらたれん

うほねとハ八重様子の名をい

後イヌキニアテキニナトノ侍ウケタルヤ

おて人里よむれハあをいを頼

つりよあけりもをよいり

黒羽の館代侍坊ちアノのまよ  
き信をさひもぬあけりの伝ひ

同初信つりて共才桃家とて

えう朝夕節とてい自のあそ

をいひて親馬のまよもまね

うき日をあそびとてい自のあそ

莊子逍遥天遊又云遠見無為理

よ道遠して大退おの位を一尺し

那須の陣原をわきてみ藤のあ

古墳をとよられよの八幡宮も信

与市麻の的を射りあそびしてハ

武王季子ミツクク  
小基上三雲  
ナスノサハラ

家系氏神ふ八光とちりり  
此神社とく竹とやうに感無射  
とつりうとくおらるるれハ秘  
室一ゆん

液驗光明寺とと者うとく  
もてり者堂とゆ

夜山一足跡をおむ首途ハ  
由小雲と序とのゆくし佛頂和る

從前勇極飛行宮統

今七途

山石法わり

佛頂和る

臥立横の五人よきぬまの

むすやくや一雨ふりゆとハ

と松の山度しと尖くと台竹のと

いつややまのりし共たると雲岸

るん松を東ハ人ててんて昔イ

いさるひつる人サるくゆのり

あさハさくさるす被林とら

游泉山

東破

中寂子知巖谷  
深西才ぞ但天

衣裘重子  
西晒

テリヤフルヤキリ  
ケシツカラ年とセ  
坂モコシエテナリ

泣家沙  
生死巨関無佛  
長鎖ス  
頼讚和尚隱居  
街山石室中

とハアキミ方クシキコトクニ谷  
多クニ松枝ニクサトモトクニ  
月を今何れニクサトモトクニ  
橋を今何れニクサトモトクニ  
まての松いつくのりし中と松の  
山より山のりれハ石上の小菴岩  
しむすいだけりか禅師の花園  
法實は竹の石室とみろく

小笠  
言五部  
イタル字  
テレタフ

木啄も  
とちあ  
そら  
る  
ゆ  
ら

教  
際  
教

石の海をよるこあらふ丁津

蝶のまじりまらぶのこのこあらふ

うさぎのりみりみりみりみりみり

新五 あり

石の海をよるこあらふ丁津

しあらしの部の邦守戸部某の

此柳みとるやもとなくよのま

しをいり此柳のりりりりりり

文セシ 極忠行

まじりぢりれ

湯不飲盗泉木

田一振極しま去る柳うれ

山家集

まをまに極し一振と極をれり

心とあまをのま

心とあまをのま

都一と使

都一と使

相坂不破館

相坂不破館

秋風を身し

秋風を身し

おふあを付

おふあを付

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

何れ也而の糸の白くはくはく

糸の白くはくはくはくはくはく

古人の冠をふくはくはくはく

衣襟をふくはくはくはくはく

改めたるはくはくはくはくはく

△ 卯の糸をかはくはくはくはく

川を海らたりはくはくはくはく

よ名城桐馬之春の庄常陸下地

の地をさくはくはくはくはく

云下をりし今ハハア星て地

新うつたりす川の驛はくはく

とりの糸をさくはくはくはく

先づけの園いしはくはくはく

同長途のくはくはくはくはく

風系し統うりはくはくはくはく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく  
△ 朝を又おぼろしく

古今。不無人  
世をいひま  
りししよそ  
よそてこわ  
ゆのわらふ

在子道臨篇云  
旦吾聞之百者  
鳥獸多而人  
其少於是民皆  
集居以避之  
益拾橡栗

曾。栢木上段  
今更之曰百葉  
氏之氏下

世をいひま  
りししよそ  
よそてこわ  
ゆのわらふ

断く〜

風流の初やあくの田植

治世不易凡流 年三歳ニ一回の白く根は白州國を去り  
他國に於て木切の作事を乞ふく

候キ〜

此右の傍〜 傍

ときめ〜 世をいひま

ろふち〜 未ゆ不食ヲ云凡

あ〜 其詞

東方修き〜 生  
の〜 生  
の〜 生

世の人乃尺〜 足別可成 軒花 知眉毛

等窮〜 玉を中姓せり

の宿を〜

色〜

もや〜

みらぬのひき  
あひのひき  
うらみ入り  
まやうらん

ふうらん  
はらと人  
あぢあぢ

語不驚人死不休

どい  
有留唐と  
このひき  
まき  
黒塚の  
福崎

拾 陸奥のま  
至氏玉塚  
こま  
しん

まき  
黒塚の  
福崎

みらの  
はら  
ゆふ

の  
まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

昔ハ  
まき  
黒塚の  
福崎

なせ  
まきの  
あひ  
はら

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

そめ  
あぢ

まき  
黒塚の  
福崎

と有る如く佐藤左目より四柱  
たのと依一とす身より極限の里  
結那とすくらくりしなりと  
くくわたりは庄の旧館也棟  
よ大木の成る人のおぬゆよと  
て洞をさみみくろのちと  
つ家の石碑をおす中も二人の  
塚よとすく先とれ也女るれと

羊祐寺裏陽辛

百姓為建碑望

者莫不流涕岩

所上流碑

現山陽江之水

緑沙如雪と

有流碑

昔々磨歴滅

うしくしきんらの世より入つるお  
うと使をわくぬ溪海の石碑  
もなききよありすちよ入て茶  
をんハ宮より新経の太刀斬を  
ういふとすりく什おとす

五月太刀も五月よ  
五月の也もお版塚よとよ  
る國泉のれん局よ入て客をら





芝居の部々入甚ハ故中お実力  
の塚ハいつの事ハと人々  
とモありふと云ふと云ふは  
の里をよのこも後と云ふ程神  
の結くことのは今くは神と云ふ  
此の五月より云ふはいと云く  
あつれはれと云ふはと云ふ  
と云ふは裏輪の事と云ふは

の折よぬまーりと

芝居ハいつとさ月のあかりは

と云ふはと云ふ

茂隈の折よふめと云ふは心は  
根ハ土除より二木よちれて  
の葉くーと云ふと云ふは先能因  
は師さひと云ふは昔むのうと云  
下りー人とはと云ふは

泥濘と云ふは其の句  
あつれはれと云ふ

の折よぬまーりと  
と云ふはと云ふ

の橋杭よりきりぬきたるものなり何  
きはしや杭はけしむ待たざる  
海より付くあるハ体あるはハ杭  
継ぎとせしや今将子歳  
のしらすものなりしや  
松のきりきりしや

武深の松女を事とすは松と  
とくもの松女を事とすは松と

梅より松ハ二月月

名取川を流しては流し入あやめ

昔より老母はと

ゆくりや流石をとりてめしはふら

匠のぬすまのし畫土かたつとまめ

何の神心あら者とけりてある人

しらすのこの有るまはまのうらぬ

名をまを考まはれんとて

一日案内す宮城郡の女状屋あ



臺碑 市川村多賀城ノ有

つゝの石の高一丈六尺餘横之六尺  
此石を穿して文字也也維國  
界之教皇をさるる此城神龜元  
年按察使鎮守符將軍大野胡臣  
東人之所里也天平宝字六年參  
議東海東山節度使同將軍  
惠養朝臣猶修造而十二月朔日

一世流布也トアリ

と有聖武皇帝の由河上吉原の  
むしりありみまらるを枕みりく  
流傳ふといはしと山崩川流て取  
りしるふ石ハ切てさるる  
本ハ左てさるるくうれを何物  
作さるるくははしとくさるる  
のをさるるくははしとくさるる  
歳の記念今服あよ古人の心

を園すり所の一徳ある余の  
視し群旅の芳をあらわして  
個と落ちるる也

うれち形田の玉川俣のるるを  
末の松山ハミとて東松山とて  
松のあひく皆蒙りくもてを  
うり一松とつゝある松の末に  
ハミのくもて也

川上あり原政、早とあり

垣うさの陣し入おのしねをす育  
ぬのを神とれて夕月夜遊上  
竹の竹もくもて一松のゆき  
きつきてきつてのまじりて  
てきつてきつてのまじりて  
いと長也其れ目音は脚乃  
理意をあらわして園とあり  
ゆきとあり早ありとあり

もあしひまひまら細ふら  
とて枕らううううううと  
うふまじとの遺風とれまの  
うみねううううううう  
の四神一備國守再興とれ  
て宮後やうううううう  
うう石の階水便うううう  
節のむううううううう

果莖土の坊ううううう  
まうううううううう  
いと貴くれ神うううう  
うれあ戸らううううう  
こま奇進ううううう  
今月の前ううううう  
うう渠ハ勇義忠孝の士也佳命  
今よまのうううううう

新  
期  
後  
やに者うううう  
二袖のううう

そ  
心

儂人の道と勢をさすく  
くさくさよとさくさく日航  
午よらうしをとりて松崎くわら

其間二里餘雄偉の物さく

河改り懐疑云

柿さくさく水松崎ハ枝葉木交  
一のぬいさくく凡河凡西湖を記す  
東南の海と入る江の中一と里  
湘江の湖をさくさく流すの流を

あつて歌ありハ天を指さすの  
を流すハ甫匐あつハ二とさくさく  
三重よさくさくたよわれ右よつ  
さくさくあり抱さくあり足跡也す  
くさく松の流さくさくやうく松葉  
波風よ吹さくさく屈曲さくさく  
さくさくさくさく甚さくさく宵燕  
さくさく美人の顔を流さくさく



神のむし—大いすまのふらなるかき  
よや造化の天工いつまの人の筆  
をうらひし 訂正と 丑とさ

雄詩の破ハ地フ—いして海をよら  
流也 雲を 揮師のふ空の如  
聖蹟石をよる 将杯のふけり  
世といふ人—帰く—いして  
落粒をよる—いして

菴田—信の—いする人—い  
そりし—いして—いして—いして  
ふ—いして—いして—いして—いして  
又ありまじ江上—いして—いして  
取れハ定をいして—二階をいして  
風雲の中—いして—いして—いして

あや—いして—いして—いして—いして  
松崎や—いして—いして—いして—いして  
不—いして—いして—いして—いして

田丸  
相作や—いして—いして—いして—いして  
若白鳥のをのつ  
きあぐえし—いして—いして—いして—いして

あや  
かひ下丸

予ハヨシトシテ願フシトシテ  
らヨシトシテ願フシトシテ  
松陰の待ありる京安通松陰  
と予の心ヲシテ願フシトシテ  
と予の心ヲシテ願フシトシテ  
と予の心ヲシテ願フシトシテ

十一日臨終志す旨書す三十二

世の昔高僧の卒年書す

入唐沙彌の及用とす

雲谷禪師の法化と依て七堂

夢語りて金壁莊嚴之を輝

仏土成就の大伽監とハる

彼見仏聖のちハいつ

廿二日卒和泉と云

孫のの孫と云

下難危葛菟の能と云

とわたりし路少きをきして  
石の巻といふ漆よかこくぬあ  
とよみてなると金花と海と  
尺や一數百の廻入に  
ひ人灰地をいひて電の  
煙をくくちこいふや  
およもれりやとちと  
と文よちり人といふ

貧乏普通陳啓

小家と一おをいひて  
又きあつたまといひ神の  
尾ゆらの牧場の世と  
めつてあつたまといひ  
まきほよよて戸伊  
一宿して平泉と  
余里といふ

三代の業耀一膳の中

大門の江ハ一里ハありて其の東に有る  
う江ハ田原ノ處ニ金鷲ノあり  
形をみたり先ニ其ノ窟ノあり其  
水上川南部より流る大川也  
衣川ハ和泉ノ城をめぐりて其  
の下より大川ニ流入康衡ホ  
江沿ハ衣ノ川を隔て南部口  
を以て其ノ東をめぐりて其

備し義臣ヲ以て此城

こり功名一時の最とるる国破

きて山河あり城春して草

もみふると金井あて町の

ついでに河とを以て其のぬ

形跡 訂定  
河は先年より有る  
いふ所の江も先年  
左 右のなるを

夜更や兵とて其の夢の江

卯のふと魚房みかひ

道て再尋りて其の二堂用帳

世に夏より其の川  
と心もよも思ふ  
あそびの世に  
家臣又其の

女白余真ヲ白毛ニカリヘテヨリ成サレタリ  
白毛

す徑堂に三將の像を  
堂に之休の権を初め  
佛を安置す七宝を  
障の扉用を金に包み  
雪上朽て既頽廢之  
と成之を四面に圍  
を覆て凡そ法物  
の記念にす

五月の修りの中  
南に道を行き  
里之傍に小石の  
とてその傍に  
とてその傍に  
此路に修り  
用をす  
園をす



雲霧よつらあなる心地して  
藤の中踏ふく氷をわたり  
は無膝ハミし肌よつめく汗を流  
しと家上の庄へおひきの  
葉向とくみのこのやみ  
必不用のうききききき  
まじりて仕人ともちとちと  
これぬはよきては物とく  
一甲半ト云レカ

乃と也

尾名澤しと信風とと者と  
ぬきハ家々のあまれと志や  
うす都しおとくひてさ  
すよ藤の情をも知れハ日比  
とめても途のやうりさき  
りしとく

今川を我舟よして行かす也

遠くまでいふ。その

中にも、

種々な人、いふ いふ

の

を

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の



山の上川のほとと大石田とて

日程を行きまゝとてと 誰かの後

とてなれとてなれぬまのまゝとて

しきり角つらりのつとやりとて

はなよきつらあーとて新たて

是よりあまきとてとてとて

まゝとて人しとてけえとて

まゝとてあゝとてこのまゝの風流

まゝとてあゝ

山の上川のみらのつらとてとて

を水とてとてとてあゝとてとて

あゝとてとて難をて板敷とてとて

を流して泉の酒田の海に入た右

霞ひたその中し船を下すも

よゆくとてとてとてあゝとてとて

白糸の流ハ青葉の傍くみえて

右を御授けの  
お世のゆ

西井

引くもたて  
かたぬ世帯に  
おのちとてあゝ  
このまゝ

お世不見

仙人を岸より修て之より  
きつてふあや

集ノ字為良何と云

五月五日を何つて早一と云

六月三日羽黒山より乞ふ圖司た吾

とと者をもとめて別ち代今んえ

因行し得ず南谷のふ後

今して憐愍の情こや

あきしと

昨日本坊よりあし誦誦具

有難や雪とくし南谷

五日権現より當山同願能除

大師のつきの代の人とて

とて延喜式より羽別里山の神

社と有書寫黒の字を里山と

ふとてや羽別黒山を申

て羽黒山とてや出羽とい

あきくしき

日向本坊のそとあし誦誦具

有糸や雪とくわく下南谷

五日権現よ詣當山同禰能除

大師いづきの代の人とて事を

とくす延喜式よ羽列里山の神

社と有書寫黒の字を里山と

ふとくしや羽列黒山と申置

て羽黒ととてくわが羽といふも

身の毛羽を此國の貢く轍と  
風土記に作すや〜月山湯殿  
を合て三山とす當寺武江東  
叡の屈し〜天台止觀の月明  
ら〜と因茲融通の法の灯け  
らひて僧坊棟とる〜飛驗  
行法を廟し〜天山靈地の餘  
効人貴思らる繁榮長し〜

り〜なれと謂けし〜  
八日月山のあり本碑あり  
し引け冥窟し〜石を色強力  
と〜の〜ほひ〜れて雲霧と  
氣の中し氷雪と踏くのあり  
本八里とあり日月行石の雲圍  
し入しとちや〜れ身於方〜  
頂上し踏れ〜日没〜日影ら

筆を補心修を枕として臥て  
思ふと新日をして世はほそく  
ぬるる

谷の待て 鉦流小谷と云ふ此水の  
源は霊水を撰て字多し潔く  
しし 鉦を打候月山と銘を切  
て世に賞せらる彼龍泉の剱  
を淬と云ふ千将莫都のむしと

そし道に塚社の祀ありと云ふ如  
くそしれをりきくし 桜のうらみ  
をりしやまのあまをそと人よりあ  
梅のつらとまはひしと云ふありや  
積雪のりしし けし春をこしれぬ  
まをぬくのあひりたるし 美この  
梅もさうさうありと云ふしり  
信正のそりのましと云ふしと云ひて

さりやまぬきととんきりあ  
梅のつらとまひしやありあ  
積雪のりしけし春をこらぬ  
さきぬのふりつら美この  
梅もさうさうありしり  
信正のきりぬしさきぬ

於て是れして是の如く七山中の  
傲あり者の法本として他三  
本を抄きし仍て善くしるる  
坊よりゆれん何國國の書に依り  
とと順礼の句に註用ふ事

浄土やらの書月のおまゝと  
書の新きまの書し月のお  
信の書よの書よの書よ

羽黒とて鶴の園の地下  
氏重行とて木のぬの  
うれて誦偈一書  
さりぬ川よとて  
とて洞窟石玉とて  
を右とて

山吹浦のくまみ

暑き日を海へいりり上り  
江上へ陸の風をぬきとらぬ  
今最ほりの方すを貴河内の際  
より東北の方すを御嶽を借し  
いさこころうすて其際十里甲斐  
やがて比叡風を御嶽と上  
雨朦朧とくしき海の上へく  
圓中へ莫作くし雨し又奇せと

まは雨後の晴色は新母まは雲  
の空へし膝をくしき海の上へ  
を新しき新天竺霏りし初るは  
やうしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは  
うしき新天竺霏りし初るは



の行人をのこす江上より陸  
阿り神功后宮の御墓とて  
を干満珠とてはまよひ幸  
ありし事とてゆすいさる  
事よやまきのまよひに  
をたを携へて風来一眠の  
あつて南より海天を  
其はさして江あり西へ

の開路をさすの東に  
舟田より海北より  
えして後方今をひくと  
え江の縦横一里あり  
くして又異なり  
如く象伝ハ  
はよみとて地物  
をるや



又月や古月も常のちよハ  
荒海や佐渡よとちよハ天の

今日ハ款しとちよハ大しり  
約きしとちよハ北國一の難事と  
越してつれ終れと捲引とちよハ  
アキとちよハ一同帰て西のちよハ  
あまの女のちよハ入中とちよハ  
臣老しとちよハそのちよハ受て

お落しとちよハおけハ越後の玉新  
ほとちよハおの越女あし一仔細かちよハ  
すちよハおしは園とちよハおのちよハ  
ちよハお右つとちよハおちよハ  
ちよハおちよハおちよハ  
のちよハおちよハおちよハ  
あちよハおこの世とちよハおちよハ  
ちよハおちよハおちよハ

うよつこみしとぬきとこし  
る様人てあしと様とくまぬく  
むとくしり染とぬ旅路の  
うとあさりまき米とくゆし  
ゆねとぬしうれしもは後と  
ひゆん衣の上のり情と大慈の  
めとをされてお家おかぬの  
と國をさるすうはあのである

ゆれとぬくはとくしとく  
ゆら方おしと人のりしと  
ゆしりしと神功の如後と  
ゆしりしと捨てあつ  
ゆしりしとゆしりしと

一家よぬきぬきとぬきと  
ゆしりしとぬきとぬきと  
くろしと十八のぬきとぬきと

り川をわたりて那古と三浦に  
土橋築の者居る春さうりとも  
知れぬと云ふ事ありの事と  
人よるれと云ふ事あり五里い  
りひいてむ事ありと云ふ事  
遊のせんぬと云ふ事ありと  
の一事の者ありと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事あり

こせの香印

入右もき物也

千の事ありと云ふ事あり  
今頃ハ七月中の五日ハ  
大坂より上り高人に處へ  
ききし事ありと云ふ事あり  
一笑と云ふ事ありと云ふ事あり  
ふのく事ありと云ふ事あり  
よき事ありと云ふ事あり



よこめしれはししし極風の吹き  
ら僕としししししししししし  
縁紀しししししししししし

日むしおな甲の下りきりくす  
ふ中の温泉水ししししししし  
ふ嶽しししししししししし  
先のら修し観音堂ありふ  
ふのはしししししししししし

とありしとわいしては太急大悲  
の縁と安んじししししししし  
と名々のししししししししし  
と字をあらうししししししし  
石とさくしし古松揺しししし  
堂あまのしし堂あまの上し  
まのしししししししししし  
石と乃石よりしししししし







庭掃てみちやちしを柳  
より取りぬききりてきり鞋の  
うへに片捨るに知ふの位を給  
の入にをみしと捨しとけ  
跡のねをさるる

けりきりぬしけりきり  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし

一辨をわたりりのくを月の拾て  
きりきりぬし

丸国天龍寺のち老ちき国  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし  
けりきりぬしけりきりぬし

叶内今統ありとて

相より御引はく余は成

五十了らうよ入て永平とこれ

す道之修師の由事や邦様

の里を避てうとて信

治をのりゆの貴をい

者とうわ

福井の里けりふれとて又

平しりて出るとてきり水の

治とてく一とてい等裁とて

ちき隠士まいつ事の手とて

江ノとてりてりてりてり

十とてゆりしといとてり

てりてり中持にりりてり

るれれといとてりてり

りてりてりてりてり

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account. The text is written on aged, yellowed paper and is oriented vertically. It appears to be a list of items or entries, possibly related to a ledger or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or account from the previous page. The text is written on aged, yellowed paper and is oriented vertically. It appears to be a list of items or entries, possibly related to a ledger or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink.

うくして比那ららまあうら  
あまむつの橋をわたりてあな  
の蓋ハねりーあまらり  
の陣をととてほむら  
あまの煙う城うま  
よめ屋をうけて十字の  
あれつうの清く一宮と  
りむらあ夜月あまら

あすのあまうあまう  
といつて遊路のあまら  
の住晴をうらう  
う帰すうらうてあまの  
うああう仲哀天皇の御  
廟也社頭神とて松の木  
の洞し月のあまら  
の白砂霜をまらう



わうしとてしめさるる方僕あつて  
あしとりののそて北風時の  
すくすく吹きまぬ信かちの  
るら海士の小ぶらうそに  
き捨不きまわりの宮の上茶を飲  
酒とていそめて夕るれのみ  
ひしとて城の塔より

筆しとて原はうららるる状

浪のるやか見しとてるそちの

甚目のらとて一等款

筆しとてさうとてさうあつて

き路通しとてみまるとさうとて

むらとてさうの國とて信ぬ

路しとてさうとて大垣の庄

し入る曾さしとて伊勢の上と

まかり合とて人しとてさうと

て如行々家々入集るる事  
川子荆口父不其ふ志  
ま人々日暮さるるて候  
世ののりあつては且  
ねひ思ひさるる旅のあつて  
をらさるるおささるる月  
六のしるのれと伊勢の辻宮  
おささるるあつて

吟の  
あつて  
わたりり



まじひるも艶やれもふくまへんたる  
まけあらもおくれおゆるさしよおほを  
たうてもまき伏す村肝を別む一殺ハ  
は兼ときおくかおお掃せまへりとおひま  
つとひをぬしてまおゆるりお言ひあすを  
かくて百殺の情中殺人の玉を揃えまへ  
そり旅ちまお悪すおの柳もまけのま  
かろゆるお人のいよよとまを眉おおの

重々々々々

元禄七年初夏

書後也

此書と古河老蕉翁の紅紙にて書寫  
法書と書の長みすふふも守七の紙の重  
み十二初終の白紙あり初成の表紙は書紙を  
以てせしむ外題も令の書紙を以てしむ白紙  
とらふも真乃初終と書年月院紙内す

とくしてり先くは長月一終ふ元禄七年

水無月予の方にも偶居すりてつづくの

めり一めり此書等の事深くとまりりりり

同一年の神無月終波のありのり終ふ

かせりやも終ひわとつとめりりりりりり

同りりりりりりりりりりりりりりりり

形りりりりりりりりりりりりりりりり

是下は終りせん不思後りりりりりりりり

あつひのうらみ——とて中絶せぬはく——  
業と見の慰にても古くよ味——とておぼし  
つら——<sup>ナ</sup>留送のち——とておぼしはく——  
ちくよ無——くよふ——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——とて  
流——とておぼしはく——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——

あつひのうらみ——とて中絶せぬはく——  
業と見の慰にても古くよ味——とておぼし  
つら——<sup>ナ</sup>留送のち——とておぼしはく——  
ちくよ無——くよふ——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——とて  
流——とておぼしはく——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——  
とておぼしはく——とておぼしはく——

流つ千の楳や流りて袖の露

元禄八乙亥年九月十日

於嵯峨落柿全書写晋

山人  
吉東叔

井筒屋の窓より——真珠細き板の

のまき葉より流るる露の跡は——今思ふとあは

と——そのまきの葉のゆる——と流るる

まきの冬伊賀の上野の中 柳風の折は

古き五古の中よは 細き糸の糸巾取は

とより見るとまき葉の跡を来は侍来乃

因縁をまき葉の跡より見るとまき葉の

——くあ——とよ——てはまきの真のくまふ

明和七寅年十月翁忌日 湖南義仲寺の

願ふべく

縁をまき

奥細道拾遺 全一冊出來

奥細道菅菰抄 全二冊出來

同附錄 全一冊出來追ラ

寛政元歲酉仲秋再板

洛陽舊門書林

井筒屋彦彦  
橘屋治彦



